

風の末裔シリーズ・5th シーズンの9

～冬虫夏草～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

「じゃ、お婆ちゃん、気を付けてね。手足を温めて寝るのよ」
最後の患者を見送って、エノシラはホッと一息付いた。

もう陽もとっぷり暮れている。

今日も忙しかった事。でも、通って来る患者さん達が元気に
なっていく顔を見られるのが、何よりも嬉しい。

戸口のカンテラを片付けようと屈んで、先の繁みの暗がり
に心配を感じた。

「また……」

嘆息(ためいき)して、カンテラをさちらへ掲げる。

「シドさん、普通に訪ねてくれていいって言っているのに」

「そっちは行かない」

繁みに座り込んでいた頑固な癖っ毛の男性が、首を振りなが
ら立ち上がった。

「子供に物を教える身として、ケジメはきちんとしてやらなくては。
決闘に負けたんだから、僕から君に話し掛ける事は出来ない」

エノシラはもう一度大きく肩で息を吐いた。

「それ以前に、むやみやたらに決闘なんて仕掛けない事を、子
供達に教えればいいわ。男同士の争いで、結局女性が不自由な
思いをする羽目になるのだから」

文句を言いながらも戸口を開いて招き入れてくれるエノシラ

の前を、シドはニハラッと通過した。

「何ですか？ 何か面白いの？」

「いや……へへ」

「何？」

「エノシラさ、だんだん蒼の里のチャキチャキ母さんに戻っ
てるなあ……って」

「えっ……」

「キラキラしてる」

「……バカ……」

「惚れ直したか?！」

窓からいきなりハトゥンが飛び込んで来た。

まったくこのヒトはいい所で！ シドは心の中で舌打ちした。

しかしハトゥンは二人に目もくれず、電光石火で部屋を横切
り、壁際の診療ベッドの下に滑り込んだ。

「っ……」

嗚然とする二人の後ろ、窓辺で、砂漠のナキネズミみたいな
キンキン声が出た。

「タンナ様!!」

振り向くと、窓枠にチョコンと小さな手と顔が乗っている。

肌と髪の色が濃い、砂の民の女の子だ。

シドも初めて見る顔。

ソバージュの掛かったチヨコレート色の髪が円錐にワサッと広がって、肩の下でバツン切り揃えているので、まるでキノコだ。大きなつり目は砂の民には珍しいしモン色。

年の頃はルウと同じ位なのだろうが、妙に厚化粧だ。爪も唇も、ベッタリ真っ赤っか。

「今ここに、砂の民のハトゥン若様が来られなかったか？」

シドとエノシラは顔を見合わせた。

「……来たけれど、君の姿を見て、表玄関から飛び出たよ。」

若様、君に追い掛けられるような、何か悪さをしたのかい？」

あわよくばハトゥンの弱味を掴みたいシドが、魂胆見え見えで聞いた。

「無礼者!!」

キノコ娘はつり目を更に吊り上げて、シドの喉元にビシッと二本指を突き出した。

「若様が悪さなどと、失礼千万！ 行く行くは砂の民の頂点に立たれるお方だぞ！ お前なぞ、同じ空気を吸うのもおこがま

うさー」

うわっめんどめんどっ！ って顔のシドに代わって、エノシラが前に出た。

「そう……でも、ここではあたし達の頼もしい家族だわ。ハトゥン

ンさんにご用なのっ」

キノコ娘はちょっと斜に構えて、エノシラを上目で睨んだ。

「モエギというのは、そなたか？」

ムッとするシドを小さく制して、エノシラは穏やかに答えた。

「いいえ、モエギさんは奥にいるわ。ご用があるなら呼んで来るけれど」

「……いや、いい……」

「そう、あたしはエノシラっていうの。貴方の名前も知りたいわ」

「何ゆえ、わらわが……」

「ヒトの家を窓から覗いて、名乗りもしないのが、砂の民の礼儀か？」

シドに皮肉に言われて、女の子はぐっと唇を噛んだ。

「別に責めている訳じゃないわ。ハトゥンさんに会ったら伝える為よ。あと、貴方と知り合いたいのもあるわ」

「はっ。何の為に？」

何か言いたそうに口を尖らせるシドを抑えながら、エノシラはゆっくり言った。

「あたしね、この土地に来たばかりなの。まだあまり知り合いがいなくて寂しいわ。だから出逢いの……一つを大切にしたい

の」

「……………」

「貴方と知り合いになれて、砂の民とお近付きになれたら嬉しいわ」

「ふんー」

女の子は大きく三歩飛び退いて、鼻を鳴らした。

「砂の民の名は、西風のように安っぽくはない。そもそもそんなら、略奪者の分際で馴れ馴れしい！」

「りゃ、略奪者あ?!」

シドが頓狂な声を上げた。

「何を略奪したの?」

エノシラもちょっとびっくりして聞いた。

「しつらいつい!」

「何が?」

「奪ったであろう!」

「だから、何を?!」

「ハトウン若様を!」

「はあ?」

「砂の民から!」

「…?」

「モエギって者がおらねば、わらわが若様に嫁ぎ、総領の家系を紡ぐ正統な跡取りを産ませたものを!」

女の子は天地を揺るがす捨て台詞を吐いて、暗闇へ走り去った。

シドとエノシラは呆然と窓の外を見やり、そしてゆっくり振り向いた。ベッドの下から這い出た若様が、心底困った溜め息を吐いて座り込んでいる。

「ハトウンさん…」

「ハトウン様、どういふ事だか…」

「そう、説明して貰おうか!!」

三人が一斉に振り向いた奥の居間へ通ずる戸口に、仁王立ちのモエギが立っていた。

「俺だって、青天の霹靂へきれきだったんだ」

モエギ宅の居間で、ハトウンは、モエギとシド、エノシラに取り囲まれ、罪人のように座り込んでいた。実に珍しい光景だ。

ルウがソラの所へ出掛けていて居ないのが、不幸中の幸いだ。幾ら何でも実の娘にまでこんな醜態さらしたくない。

「そもそも俺がまだガキの頃の話だ。砂の民の分家の、谷の方の部落があるだろ?」

「ああ…」

モエギにはすぐ分かった。自分の父の生家のあった辺りだ。

ハトウンの父の統べる地の一つだが、部族の中心から大分離れているので、のどかでのんびりした所だ。

「そこに親父の竹馬の友で生真面目なおっさんが居てさ。何かの拍子に親父が、『お前の娘ならハトウンの嫁に欲しいぞ』とか言ったらしいんだ。多分何か、誉めついでに物の例えて言っただろうが…、おっさん、思い切り本気にした」

「はあ…」

エノシラは気の抜けた顔をした。そんな会話は話のハズミでよくある事だ。特に、酔っ払いのお父さん同士に。

「それである子はそのチクバの友の娘って事ですか？ でも、今時の子供がそんな口約束を真に受けますかね」

シドもエノシラと同じ感覚だ。

しかしモエギは腕組みして真顔で聞いた。

「ハトウンの子供の頃の話にしては、あの娘は随分若かったな」

「ああ、その後、その友人殿の所は十人男の子が続いた。彼女は十一番目の末っ子だ」

ハトウンも真顔で答えた。

「そっか、……十人……」

「モエギさん……？」

「エノシラ、蒼の里ではどうだ？ 十人男で、最後に女の子」

人の兄弟っているか？」

「珍しいですね…」

ノスリ家も子沢山の家系だが、兄弟十人同性が続くってのは、そうそう無い。

「それがな、砂の民の部族では普通なんだ」

モエギは噛んで含めるように言った。

「いや、普通でもないぞ」

ハトウンが口を挟んだ。

「十人の最後にでも女の子を授かるって事は、金脈を掘り当てたみたいなラッキーだ。一族あげて七日七晩宴を開く」

ハトウンはいつも物事を飾り付けて喋るが、今はぶざけているようには見えない。

同じく真顔のモエギが続けた。

「そんな砂の民が、生まれた娘を嫁にくれるっていう……それは、重いぞ……」

「そうですか？」

シドはまだピンと来ていない。砂の民の部落に女性が極端に少ないってのは、何となく知っている。

「でも、それなら西風の里だって同じでしょう？。西風は男の出生率が同じように低かったんだし」

「えっ？ そうなんですか？」

「シド、同じではない」

モエギが即否定した。

「沢山の女達の中の一人の男性…、大勢の男達の中の一人の女性…、エノシラ、同じだと思つか？」

「いえ」

エノシラは即答した。

「男性と女性、子孫を残す役割が違うから…。その…幸福度とか、そういうのが、全然、違つと思います」

「そんな生っちょろいモンじゃない」

ハトウンが額に手を当てて言った。

純度100%真剣な、とつてもレアなハトウンだ。

「部落に極端に女性が少なくなった最初の頃、決闘や争いが絶えなかつたらしい。親父殿の先々代が打ち出した苦肉の策が、一妻多夫だ」

「い、いっさいだふ？」

「ああ、周囲が認めた能力の優れた男以外は、単独で妻をめとれない。女性は一兄弟単位の男達に嫁ぐ。それが部落内の秩序を保つ一番の方策だった。親元には夫の人数分の結納金が入る。ラッキーって宴を開く訳だ。そこには女性の意思ってのはケシ粒程も存在しない」

「……………」

「殆どの家では、妻に女の子が生まれるまで出産を強要する。だから砂の民の女性は、四六時中お腹が大きくて、そして皆…とつても短命だ。さあ、シド、西風の男と同じか？」

「……………」

エノシラはじつと聞いていたが、だんだんに顔色が悪くなつた。

「ホントなんですか？ モエギさん…」

「ああ、だが一昔前の話だ、エノシラ。ナーガの働きかけで、砂の民の男と西風の女が交流するようになった。今はその子供達の世代だ。男女の数の差はなくなっている」

「そう、一妻多夫は二世代前の話。今時の若い者は自由恋愛だ。

しかし、部落の端っこのド田舎では、古い因習が残っていた」
ハトウンは再び額を指で押さえた。

「じゃあ、あの女の子……………」

「生真面目な旧友殿は、親父の軽口を一直線に思い込み続けていたんだ。そうしてやっと授かった貴重な女の子、他の親族からすぐに隠した。何せ女の子は一族の財産だ」

「…さ、財産…」

「親父との約束を果たしたい一心だったんだろうな。生まれたばかりの赤子を、東の砂漠の清宮せいみやに預けた」

「清宮か…」

「清宮って何ですか？ モエギさん」

「男子禁制の結界地帯だ。砂の民に限らず、様々な種族の女性が集まって、神と精霊に奉仕の日々を送る……いわゆる、修道院だ」

「修道院…」

「砂の民の部落でちょっといい家に生まれた女の子は、大抵預けられていた。安全だからな。その為に親父、毎年すんごい寄進をしていたんだ」

「しかしそれもちょっと昔の話だろう？。今は女性の為の駆け込み寺的な役割が濃いと聞いたが。まだ預けられていた女の子がいたとは…」

「預けてすぐ旧友殿、鬼籍に入っちゃった。母親も早世したらしいから、末娘は存在を忘れ去られたまま、修道院の奥に取り残された。こっちはそんな事これっぽっちも知らない。知らない所で、俺の花嫁になるとだけ教えられた娘がスクスク育って、一昨日いきなり目の前に現れた」

「それがあの娘か……」

「やっとな話が繋がった。」

「清宮の主殿から連絡があって、親父も初めて知ったんだ。そ

れで、慌てて呼び寄せた」

「総領殿が…」

モエギはちょっと俯いたが、すぐ顔を上げて、ハトゥンに小憎らしい顔を向けた。

「よかったじゃないか、ピチピチ肌の張りのいいコギャルに追っ掛けて貰って」

「冗談！ 娘と同じ年の乳臭いガキなんか相手に出来るか！」

「あの子……ハトゥンさんのお嫁さんになるってだけしか無くて育ったんですね…」

エノシラがボツンと言って、言い合いしていたハトゥンとモエギがシンと黙った。

「ハトゥンさん、逃げないで、きちんと受け止めてあげるべきです」

西風の里の修練所の玄関。

カンテラを間に置いて、ハンチに腰掛ける長い影が二人分。

「それで、その見習い鍛冶屋はどうしたの？」

「結局へっぽこ勇者殿の剣を持ち逃げしてしまっただんです。でもお陰で勇者殿、ドラゴンと闘わずに済んだ」

「あはははは！ あははははは！」

「ドラゴン伝説も鍛冶屋が流したんですけれどね」

「あはははー！」

「ああ、もう、月があんな所だ。ルウシエル、そろそろおやすみなさいにしましょう」

「ええー、もうちょっと、いいじゃないか。ねえ、ソラあ」

「夜更かすると背が伸びませんよ。頭の成長にもよくありません」

「私、もう子供じゃない」

「まだまだ一杯の伸びしろがあるんだから子供です」

「ぶー……」

「さ、坂の下まで送りますよ」

「いい。じゃあ帰るからさ、その前にソラの部屋へ行きたい」

「……」

「えと……、本も借りたしき、ね、ちょっとだけ……」

「……駄目です」

ソラは静かに言った。今日が入ってみるだけでも、一度部屋へ招いてしまうと、次来た時も部屋へ行く事となる。

ルウシエルはもう十六だ。水浴び場で裸で駆け回るのをタオルを持って追い掛けていた頃とは違う。

「ケチ!!」

ルウは舌を突き出して、アツカンべしながら坂を駆け降りて行った。

「転ばないで下さいよー！」

坂の下までカンテラの灯りが辿り着いたのを確認してから、ソラは玄関に入って部屋へ戻った。

シドはまだ帰って来ていない。最近エノシラの仕事が遅いので、彼も終わるまで待っている。こう毎日でなくともいいのに、健気な事だ。もっとも放ったらかし過ぎてエライ事になりかけたんだから、怖くて目を開けられないのが本音だろう。

「あれっ？」

部屋へ戻ると、窓辺に積み上がっていた書物が崩れ落ちて、シドのベッドにハトゥンがうつ伏せに倒れ込んでいた。

「……よっす……」

「こんばんは。珍しいですね」

ソラは肩を落として、散らばった書物を片付け始めた。

「フルイ、ちょっとかかまってくれるか？」

「はあ？ まだ何かやらかしたんですか？ 早めに謝っといた方がよいですよ」

「モエギじゃない。もっとおっかない奴に追われている」

「モエギ様よりおっかないって？ 暗殺拳の使い手にでも追われてんですか？ それこそモエギ様んちに逃げ込めばいいのに」

「あすこは駄目だ。女は所詮、女の味方だった」

「……」

坂を一気に駆け降りたルウシエルだが、部落の入り口で足を止めた。民家の窓辺に吊るされた干し芋に、暗がりから誰かが手を伸ばしているのだ。

「盗人？」

ルウはそおっと近寄って、真後ろから盗人の手首をガシッと掴んだ。

「ひっ」

小さく悲鳴を上げたのは、以外にも同年代の女の子だった。しかし背はルウより大分低い。芋に手を屈かせる為、木箱と金ダライを重ねて踏み台にしていた。

ガラガラと大きな音がして、その家のおかみさんが窓から顔を覗かせた。

「おやっ」

そこにはひっくり返った金ダライと、尻餅を付いたルウシエル。

「すまない、ボケッとしてて、つまづいたんだ」

「毎晩健気だね。じつだ、チュウへらいはして買ったかい？」

ソラの堅物具合を知っているおかみさんは、ここを通るルウシエルを、度々からかっていた。

「清く明るくガラス張りですから！」

ルウが口を尖らせて、おかみさんは笑いながら窓辺を離れた。

「もういいぞ」

金ダライの下からキノコみたいな頭の女の子が這い出した。

「来い」

ルウは女の子の手を引いて、坂の下の人家のない所まで戻った。

「何で、庇った？」

「腹が減るのはしょうがない。生きとし生ける者の摂理だ」

ルウは懐から包みを取り出した。今しがたソラに買った、出張土産の豆菓子。

「一個残しといてな」

女の子は袋を受け取って、甘い香りに唾を飲み込んだ。

「……………」

「腹減ってんだろ、食え」

「…あんだの、チュウもしてくれない彼氏に買った物か？」

「そんな事言うんなら、やらない、返せ！」

「嫌だ！一度買ったモンだ！」

「それで逃げ回ってるんですか」

書物の山の中に埋もれた葡萄酒の瓶を引き抜いてナイフで開封しながら、ソラは眉を八の字にした。

「申し訳ありませんが、僕もエノシラやモエギ様と同じ意見ですよ。逃げ回ってないで、一度ちゃんと話し合おうべきでしょう?」

ハトウンは近年稀に見る情けない顔で膝を抱えた。

「お前は、あいつの襲撃を受けた事がないから、そんなのがな事が言えるんだ……」

「そんなにいっぺんに頬張るからだ」

ルウは近くの水場から汲んで来た水のコップを、キノコ娘に差し出した。菓子を喉に引っ掛けて目を白黒させていた女の子は、慌てて水にむしゃぶりの着いた。

「はあ…ゲホゲホ…」

「大丈夫か?」

「だって、返せって言うから…」

「本気な訳ないだろ。あーあ、一個も残してくれなかった…」

袋を逆さにして恨みがましい目で見るルウに、女の子はケロリとした顔を向けた。

「あんな甘いモン、初めて食べた」

「そいつあよかったな」

「食べたかったか?」

「まあな…」

「チュウもしてくれない彼氏のくれたモンだからか?」

「今度それを言ったら殴るぞ」

「わらわのダンナ様もチュウしてくれない」

「?」

「それはわらわを箱の中のガラス細工のように大切にしてくれているからだと思っっている。お前の彼氏もきつとそうなんだよ」
いきなり何を言い出すんだと面喰らったが、この女の子、もしかして自分を元気付けようとしてくれてるのか?」

「うん、私も、そう思っ………いたい」

「違っのか?」

「そう思っっていたけれど………まったくずっと、指先にさえも触れてくれないのが続くと、不安になるんだ。私の手を引いて助けてくれたのも、ただの同情だったんじゃないかって…」

「指先にさえも触れてくれない間、お前は何してた? 努力をしたか?」

「えっ」

ルウは耳まで真っ赤になった。

「し、してるさ…、部屋に入れてくれて頼んでみたり…」
何で初対面の女の子とこんな事話してるんだろ?」



「その程度は努力とは言わない！」

女の子はきっぱりと言って、残りの水をグイッと飲み干した。そして口の端から流れる滴を手の甲でギュッと拭いた。

「わらわは全て準備万端の状態で旦那様の寢所で待ち伏せしたりしたぞ」

「じ、準備万端の状態って……？」

ルウはゴクリと唾を呑み込んだ。

「はあ…、寢所で油断しまくって横になった所に、いきなり、

ベッドの足元から襲撃……ですか」

ソラはゴクリと唾を呑み込んだ。

「オマケに親父殿も抱き込み済みで、戸口をガッツリ固められていた。退路を断られた上、あんな格好で絡み付かれてみる。

必死で理性を保って、隙を見てシーツにくるんで縛り上げて、換気口から逃げ出したんだ」

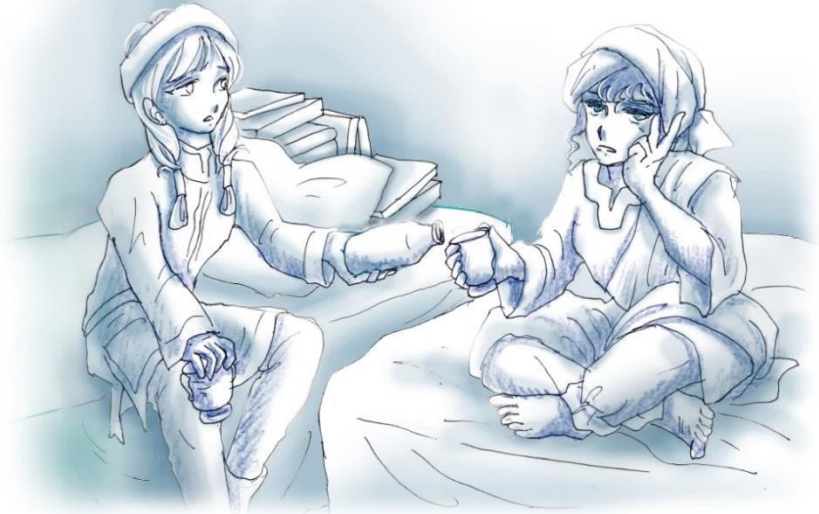
「…それは……ご愁傷様です……」

「話し合いもクソもあるか。あっちは執念のカタマリなんだ」

ソラは葡萄酒をチビチビやっていた手を止めて、ハトゥンをジッと見た。

「相手がそこまでやるんなら……腹くくったらどうです？」

「……お、おいおこ」



「総領殿がその娘の事、乗り気なんですよ。第二夫人にと」
「……………」

「モエギ様も、何も言わないんじゃないですか？」

「ソラ!!」

ハトゥンは真剣な顔で立ち上がった。

「お前、冷たい奴だと思っていたけれど、ホント、冷たいな!」

「冷静に物事を考えているだけです。総領殿が、自分の所に世継ぎが欲しいって思うのは、当たり前でしょう」

「自分の事は遙か棚に上げてか! あのおっさん! だったら俺にもっと兄弟作っとけばよかったんだ!」

「ハトゥン様!」

「葡萄酒、ごっそさん! アバヨ!」

ハトゥンは空のコップをベッドに投げ出して、積み上げた書物をまた崩して窓から出て行った。

「…ふう……………」

ソラは溜め息付いて、また書物を片付け出した。総領殿の悩み処がよく解るのだ。

モエギは、ルウを身籠った時、極度に身体を悪くした。一時は命の危機にまで陥って、だから多分、ハトゥンはルウの下に子供を設けなかったのだ。その点は、ソラがハトゥンを尊敬す

る理由の一つだ。

だけれど、砂の民の総領殿にしたら、話が違つて！ っと思いだらう。ハトゥンは一人息子だ。モエギの生む第一子は西風の後継でよいが、子供の何人かは父親の元に引き取れると思つていた。それが、もう子供を設けないというのは……困る！

ルウを何年か面倒見ていた時も、結構本気でそのまま引き取るつもりだったのだらう。さすがにモエギに倒れられたら、返さざるを得なかつたようだが。

「多分、モエギ様も分かっている。だから、ハトゥン様に対して、その娘の事、否定しないんだ」

ソラは窓辺に寄つて、ハトゥンの去つた夜間に目を凝らした。世継ぎが必要な者が、第二第三夫人を持つのはままある事だ。誰も責めはしないのに、あそこまで拒絶するのは……モエギ様に対して、ただただ少年のように健気に純粹なのだ。それも、ソラが何ともハトゥンに敵わないと思つてしまふ理由の一つだった。

「ぶ……ぶつん……」

リアルに生々しい表現で色々説明されて、ルウは目を白黒させて、生唾こっくん呑み込んだ。同じ位の年頃なのに、知つている事が全然違つた。

「す、凄いな……。そこまでやつて、努力つていいのか……」

「努力の入り口だ。その他に、ダンナ様の父上に気に入られ、使用人も味方に付けておく等の、細々した努力も必要だ」

「はあ……」

「わらわの目指す処は、甘つたるい恋人ではない。あくまで、一族に嫁ぎ子を為す、価値あるお嫁様なのだ。清宮の主様ぬしさま」そう教わつた

「清宮(せいみや)……」

砂の民の部落で数年を過ごしたルウも、その存在と意味を知つていた。

「ああ、一昨日、そこから出て来た」

「だけど、それじゃ、お前……、そのダンナ様、会つたばかりじゃないのか？ 好きとか思う暇、なかつたらう？ それで、いきなり、その……努力つての……？ 出来るのか？」

「まさか?!」

女の子は、何を馬鹿言つてる?! という顔をした。

「ダンナ様はダンナ様だ。好き以外の何があるつていうのだ？」

それに、初対面つて訳でもない

「そう？ 面会とか来てくれたの？」

「清宮は全くの男子禁制だ。だから、主様にダンナ様の絵姿を貰つたんだ。それをベッドの枕元に貼つて、朝晩挨拶していた。

叱られた時や病気の際は、その絵姿に泣きついた。そしたら、
絵姿が微笑んで慰めてくれるんだ」

「…絵姿……」

「勿論、そう感じるだけだけれど。すうっと、すうっと、ダンナ様に慰められて、寂しいのも乗り越えて来たんだ。だから、清宮から呼び出されて、とうとう本物のダンナ様にお逢い出来た時、天にも昇る程嬉しかった」

女の子は夢見る表情になった。恋する少女の表情。しかしそれは、相手との間に育んだ物ではない。

清宮に預けられた女の子は、立派な花嫁と為るべく教育される。それを、不幸とか時代遅れとか言うのは、無責任な外野だ。自分達の常識で彼女らの人生を否定すべきではないって思う。

「そっか……」

ルウは、キノコ娘の幼い指に似合わない真っ赤な爪を、そっと見た。

「あのさ……、そのダンナ様に、そういう事、話した？ 毎日、絵姿に挨拶していたとか」

「いや……まだ、ダンナ様とは、ゆっくりの話す時間を持っていない」

「じゃあ、その話、してみたら？ そしたらダンナ様も、

お前の事、大事にするだけでなく、別の感情も湧いて来ると思うよ、きっと」

「…そっか？」

今まで自信满满だった女の子だが、ここで初めて不安な表情をした。

「別の感情も、湧く…かなあ…？」

「ああ、お前も、もともっとダンナ様の事を知って、もっと好きになれたらいいじゃないか」

「うん…ああ、そっだな…」

人家の灯りがポツポツ消えだした。そろそろ帰らないと、モエギが心配する。

「お前、こんな時間から砂の民の部落へ帰れるか？ 何だったら、うちに泊まるか？」

「大丈夫だ。ダンナ様と一緒に帰る」
「そっか」

西風の里にも砂の民の混血の者が住んでいるし、仕事や用事で出入りする者も多い。ダンナ様に着いて来て、待ちくたびれて、つい芋に手を伸ばしたんだろう。

「えと、私はルウシエル。お前は？」

「…わらわは……」

「あ、そっか、砂の民は滅多な事で名乗らないんだっけ」

「いや、いい…。お前には重ね重ね世話になった」

女の子は顔を上げて、シモン色の瞳をルウに向けた。

「カーリだ。砂の民のカーリ」

「うほ！ 素敵だ！」

カーリというのは、殺戮の黒女神だ。

砂の民は、魔を寄せ付けぬよう、女の子にわざと恐ろしい名を名乗らせる。因みに『ルウシエル』は、『地上に落ちこちた悪魔』だ。本当の名前は親しか知らずに、そっと隠してある。

「じゃあな、カーリ」

ルウは手を振って、修練所の坂を駆け上がった。早く帰るべきだが、どうしても、今、やっておきたい事があった。

書物を片付け終わった所で、雨戸をトントン叩かれて、ソラは、また書物を崩されないよう、身体で支えた。しかし、外からした声は、ハトウンではなかった。

「ソラ…起きてる？」

「ルウシエル?! …窓は開けられませんかよ。女の子が男性の部屋へ来ていい時間ではありません」

「うん、分かってる」

「…何か、用ですか？」

「あのさ…」

「はい」

「小さい時から、シドはあたしに甘かったけれど、ソラは駄目な事は駄目ってきっぱり教えてくれたろ。そんなソラが好きだった」

「えっ？」

「そんだけ」

「ちよ、ちよっと待って下さい！」

ソラは慌てて雨戸を開けた。

「あれえ？ 開けないんじゃないの？」

普段の顔のルウシエルが、去りかけの姿勢で振り向いた。

「急にそんな事言うから、何処かへ行ってしまっのかと思うちようでしょ」

「まさか。えと…、一日一個、私がソラを好きな理由、話す事にしたんだ。今のが、第一回」

「はあ？ 何だっけいなさ」

「何でもいいだろ。じゃあ、おやすみ」

「ちよ、ちよっと」

ソラは窓を飛び越した。書物の山がまたバサバサと崩れた。

「もう部落の方も真っ暗だ。送ります」

「…うん…」

ルウの持つカンテラをソラが受け取って、横に並んで歩き始めた。ソラの体温をすく横に感じて歩くと、砂漠の冷氣なんか全然感じない。

初めて会ったカーリのお陰で、こんな一時を過ごさせている。出逢いって不思議だ。

「ほおら、見つけた」

部落外れの廃墟群。朽ちた建物の一つを覗き込むシド。そこには、丸くなって眠りこけるキノコ娘がいた。

この建物が、唯一屋根が掛かって壁も三方ある。子供が潜り込むにはもってこいなのを、普段子供を相手にしているシドはよく知っていた。

「おおい、お嬢ちゃん、起きろ」

肩をユサユサ揺すぶられた娘は子供みたいな声音を漏らした。

「ふにゃあ…、主様あ…、もうちよっと…」

「風邪ひくぞ——」

「うにゃ…?」

「起きたか?」

「ろ、狼藉者!!」

「誰がだ」

シドは振り上げる女の子の拳を軽く掴んだ。

「モエギ様から伝言だ。西風の里で年頃の娘にフーテンみたい
にフラフラされるのは困る。間違いが起こってからでは遅い。
とっとと砂の民の部落へ戻るように」と

「モエギがか? 嫌だ! わらわはダンナ様と一緒にでなけりゃ、
帰らなう」

「そのダンナ様だけれど、多分もう西風の里にはいないよ」

「な…に…? 嘘を言うな!」

「本当だつてば。君のお陰で総領ん所を飛び出して、モエギ様
に責められて叩き出されて、…やれやれ、何処へ行ったやら」

「…わらわの、せいなのか?」

「まあ、そうともいう」

「……………」

女の子は殊勝に唇を噛み締めた。

「ダンナ様、こんなに暗くて寒いのに、行く下」なくなっちゃ
ったのか…」

意外にシユンとしてしまつて、シドはちよっと言い過ぎたか
なつて思った。

「ああ、いや、多分大丈夫だよ。砂漠に隠れ家を一杯持つてい
るし」

「本当か?」

「心配しなくても、その内必ず総領人所へ戻るよ。あのヒト、自分の立場は忘れないヒトだから」

「……………」

シドが手を差し伸べたが、女の子は一人で立ち上がった。

「ここまでどうやって来たの？ 歩いてじゃないだろ」

「ダンナ様の馬を追って、暴れ口バに掴まって来た。何処かへ行ってしまったが」

「やれやれ。じゃあ僕の馬で送ろう。おいで」

「……………」

女の子は突っ立ったまま動かなかった。

「わらわの事は放って置けはいい」

「またそんな事言って。放っとける訳ないでしょ」

「何故だ？ モエギの命令だからか？ 送った事にして置けばいい」

「……………」

「そうじゃなくて！ 女の子をこんな寒空の廢墟に放っとける訳ないでしょって事！」

「……………」

「ああ、行くよー！」

シドは無理矢理女の子の手を引いて歩き出した。キノコ娘は抵抗はしなかったが疑問顔だった。

「分からない……………」

「何が？」

「女の子というのは放っとけないモノなのか？」

「あああ・もう!!」

シドはどっちかというところ、議論は苦手だ。子供の『どして？どして？』も苦手だ。

「君を放っとけないの！ 君が風邪ひいたり、悪い奴に構われたいしたら、僕が嫌なの！ 分かったっ?！」

「…分からない……………」

「ああー！ まだ?」

「何故…………この部落の者は、皆、わらわに構う？ 大事にしてくれる?」（この部落の跡取りを生む訳でもないのに…………）」

「……………」

「やっぱりここだった」

砂漠の端、砂に埋もれた太古の遺跡の石の床。

寝転んで星空を見つめていたハトウンの視界に、オレンシの瞳の女性が、月を逆光に映った。

「昔から親父さんと喧嘩すると、家出してここへ来ていたな」

「……………」

ハトウンは光のない真っ黒な瞳を手ラリと女性に向け、口の

中でブツブツ呟いた。

「馬鹿ヤロ…、こんな夜中に歩いたりして、冷えちまうだろ」

「ああ、最近は調子がいいんだ。もうすぐ普通に元気になって、皆に心配掛けなくとも済むようになるぞ」

「……………」

「お前にもな」

ハトウンは起き上がったが、相変わらずモエギから視線をそらして黙っていた。

「あの娘はシドに砂の民の部落へ送らせた。キチンとしてやれ。子供じゃないんだ」

「ああ！ 子供じゃないともー！」

ハトウンは振り向いた。

「それで、お前は、俺がお前以外の妻を何人めとつても平気なんだな！」

言ってしまうから、再び目を背けた

その耳を後ろからキュッと引っ張られ、何か言う暇もなく、両頬をバチンと挟まれた。

「平気なもんかー！」

モエギの激しい表情が真ん前にあった。ここ暫く見せなかった、オレンジの瞳を燃え立たせたモエギ。

「……………」

「キチンとしてやれっつのは、責任持って面倒見てやれっつ事

だ。あの娘はお前だけが扱ひ所なんだからな」

「……………」

「お前は優しい。砂の民の他の男共と違って、女達の状況にずっと心を痛めていた。だからナーガの誘いにあっさり乗ったんだろっつ。」

「……………」

「お前は良き総領となれる」

「……………当たり前だ…」

「そのお前には、やっぱり、お前の優しさを汲む良き跡取りが必要だ」

「モエギ!!」

思わず睨み付けるハトウンの目前で、モエギの瞳は焰を絶やさず朗々と燃え続けている。

「待ってくれないか？ ルウの道はもうすぐに目の前に開きかけている。あの子が一人で歩き出せる日はそう遠くはない」

「……………」

「お前に世継ぎが必要ならば…、私が生む。お前の血を受ける子供が、私以外の身体を経てこの世に来る事などあり得ない。それは水が高みより低きに流れる如く、当然な摂理だ」

「……………」

「当然な摂理なのだ。その摂理の前には、私の命も全ても霧散する程に」

砂の民の人口は西風の十倍以上で、広大な部落全体が力強く活気に溢れている。

総領の館は何重にも塙のある、ちよっとした城塞だ。

門番のいる入り口に訪れる、一人の青銀の髪の妖精がいた。

「あ、ソラ殿、久しぶりですね」

ルウがいた頃、家庭教師に通っていたので、門番とも顔見知りだ。

「総領殿に目通り願えるかな？ 約束はないんだけど」

総領は城塞の奥の私室でソラを出迎えた。閻魔様のような肩間のしわを更にギッと深くして、西風の青年に椅子を進めた。

「西風のソラよ、言いたい事は分かっている。しかしお前達の大切な長殿をながしるにしている訳ではない。むしろ、長殿の負担を軽くする為」

「は？」

ソラは目を丸くしてしばらくくた。くた。

「この、お話ですか？」

「いや、いえ……」

総領は苦虫を噛み潰した顔で、大きな椅子に深く座り直した。相変わらずの青狸め……。

「本日は遅ればせながらご挨拶に伺いました」

ソラは勧められた椅子に座らず、床に膝を着いて深々と礼をした。

「お孫様のルウシエル様と、夫婦（めおと）を前提としたお付き合いをさせて頂いております」

総領は喉をグウッと鳴らした。

「本当に遅ればせながらだな。そなたが孫娘の婚礼をぶち壊したのは、既に衆目の知だぞ」

「恐れ入ります。しかし、私がやらなければ、父君のハトウン殿がやらかしていたでしょう。もっと派手なやり口で」

「確かに・な・・・」

総領はこれ以上ない苦い顔をした。

「私は……総領殿……」

ソラは膝まついたまま、掌を胸に当てて、総領の目を真っ直ぐ見た。

「ルウ様が、『砂の民のルウシエル』でもある事を、常に忘れてはおりません」

「……………」

「例えば、将来、私とルウ様に子を授かれば、その子は砂の民の子でもあるのです」

「ふん…」

総領はちよっとだけ和らいだが、相変わらず渋い顔のまま言った。

「だから、後継ぎには事欠かない、ハトウンに第二夫人を無理強いする事はない…、という論法か？」

「まさかまさか、その事に付いては、私の口出しすべき範疇ではございません」

ソラは膝まついたままシレッと言った。

「では西風のソラよ。ルウシエルがもし懐妊によってモエギ殿のように命を危険にさらしたらどうする？ お前も子を為す事をためらうだろう」

「はい、ルウ様が大事ですから」

ソラはまたもやシレッと言いつつ切った。

「しかし、状況は改善しております。西風に、蒼の里より優秀な助産師が来てくれました。医学の心得も厚い、全ての妊婦に心強い存在です」

「あの三つ編みの小娘か？」

ここでソラは初めて表情を変えた。隠しカードを先に知られ

ていたか…。

「ご存知でしたか」

「そなたより一刻早く、訪ねて来たわい。ハトウンの婚約者に会わせろと」

「……………」

「中庭におるぞ。カーリもさして嫌がらず、話に応じておるよ
うだ」

「……………」

「そなたにも、想定外であったか？」

「……………はい…」

総領は、初めて顔を緩めて、がははと笑った。

中庭の巨大な水盆に金魚が泳ぎ、その縁に二人の女性が腰掛けていた。

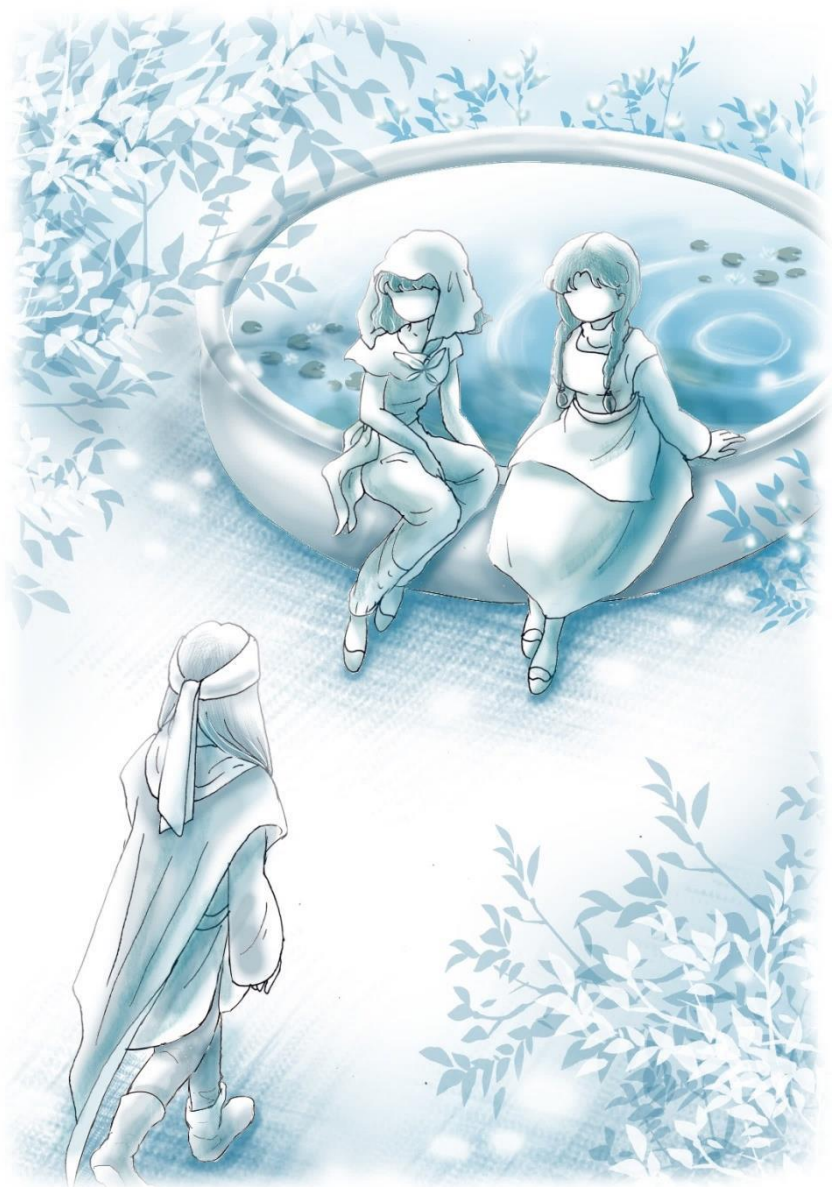
「あら、ソラさん」

「驚いたな、エノシラ。一人で来たの？」

「シドさんが仕事前に送ってくれたんです。一人で大丈夫って
言ったんだけれど」

エノシラの後ろで、シモン色の瞳を怪訝そうに向ける娘がいる。

「ルウが、殿方の扱いに付いて、とっても的確なアドバイスを



して貰ったって言うていたので、あたしも恋の悩みの相談に乗って貰いに来たんです」

「それはそれは…」

ソラはキノコ頭の娘をサラリと見た。

「確かに、シドは君を悩ませっぱなしだからな。しっかり相談に乗って貰うといい」

「あら、ソラさんもヒトの事言えませんよ。ルウも結構悩める乙女だったみたいですからね。ねえ、カーリ」

「ここでキノコ娘は、レモン色の瞳をカッと見開いた。

「お前かあ！ チュウもしてくれない彼氏というのは!!」

「えっ、えっ?!」

ソラは泡喰って飛び退いた。

エノシラは吹き出したいのを堪えて、面頬を膨らませている。

「チュウぐらいしてやれ!! 減るモンじゃなし!!」

石造りの城塞の二階の私室から、総領は、中庭の三人をじっと見つめていた。カーリに、数日前呼び寄せたばかりの思い詰めた表情はない。

「不思議な連中だわい」

モエギを中心に、その周囲の者達が、申し合わせるでもなく一人一人、暖かい大地のようにあの娘を慈しみ導いた。そんな

西風の民を、いつからか頼もしく愛おしく感じている。

カーリ…漆黒の女神。

亡き友の大切な遺児(かたみ)…。

ハトゥンには中途にしか説明していないが、正確には、自分の友ではない。自分の亡き妻…ハトゥンの母の親友だったのだ。カーリの母親が…。

一昨々日、カーリを迎えに行った清宮で、主殿が見せてくれた古い書簡。

《この娘は我が息子ハトゥンの花嫁に》と、総領の刻印の元はつきり書かれたのは、まごう事なき妻の筆跡だった。

妻の親友…レモン色の瞳のか細い女性は、他の多くの娘と同様、清宮から多兄弟の夫の元へ嫁いだ。

嫁ぎ先でどのような思いをするか…、それは千差万別で、一概にはいえない。ただ、しばらくして精神を少し病んだという話は、妻以外の他所から聞いた。

女達の間で、どのような旬順があったのかは、今となっては知りようがない。ただ妻は、彼女の心を少しでも救おうと、思案の末約束したのだろう。

貴方に娘が出来たなら、私の息子に嫁がせましよう。総領家に嫁げば、複数の夫を持つ身にならずに済む、けして貴方と

同じ道には乗せませんよ……と……。

一筆書いて持たせたのは、気休めだったのかもしれない。でもそれは、漆黒の闇に住んだ彼女の、生きる大きな灯火となったのだろう。自分の生む娘は、幸せになれる……！

十何年か後……

ハトウンの母は既に亡くなっていたが、カーリの母は、生まれたばかりの娘を抱いて砂漠を渡り、清宮の門を叩いた。

そうして昔親友がくれた証明と共に、赤子を清宮の主に託した。その後一人部落へ戻り、誰にも何も告げず、ひっそり黙して逝ってしまったのだという。

赤子が成人の歳になって、初めて清宮の主から連絡があった。

全く……知らなかった……。妻やその親友にとって、自分も、冷たい分からず屋の男共の一人だったのだ……。

カーリの、ナキネズミみたいな頓狂な声で我に帰った。また何か、新鮮な驚きに出会ったのだろう。

長き土中生活の末、飛び立つ事も出来なかった母親。

その母の願いを糧にこの世へ来た、澄んだしモン色の瞳の娘。妻が幸せを約束した娘。

馬鹿息子とどうなるかと、この先自分のかけがえなき娘となる事に変わりはない。

くおしまい

